＜竹内報告にたいする討論＞

討論の基調は、伝統的なものと構造変動的なものの関連いかん、そして、それにかかわる近畿的特徴いかん、にあった。

まず、伝統的なものにかんする研究と変動にかんする研究とが二分されているが、それはどういう視角からおこなわれ両者の交錯はどのように把えられるのか、また、二分するにあたって全国的な研究動向とは異なる近畿的特徴というものが指摘できるかどうか、という根本にかかわる質問が出された。

それにたいして、報告者は、高い生産水準をもっていた近畿農業が、戦後の経営零細化によって基本法農政以降の「近代化」の波を他地域より一層激しくかぶり大きな変化を示したという事実をふまえながら、二つを結びつけて把える視角についてはこれまでの研究も十分提出していないし自分も設定しきれていないので、それぞれの研究の主題に則して二分の判断をおこなわざるをえなかった、と答えた。

近畿は先進地域といわれてきたしそう考えてきたが、意外に伝統的なものが残存しそれについての研究が多いことに驚かされた、との発言もあり、近世中期に役屋体制が再形成されたり、本百姓の自立にともなって同族組織の再編強化がおこなわれたり、新しいものの展開のなかで古いものが再編されていく歴史的ダイナミズムに注目し、そのなかに近畿的な特質をも見出さねばならない、という意見が出された。

そして、それに関連して、同族的なものが地縁的なものと相互に深くかかわりあっていることが株講などを事例として語られ、また、宗教的な行事にかかわって、一村レベルで宗教が保持されている近江の事例にもとづいて、そこでは同族的な宗教行事や組織が大きな意味をもっていないことが指摘され、同族宗教だけを固定的にとらえるのではなく少くとも一村レベルの構造変動を基礎においてみなければいけないことなどが言われた。

（岩崎記）